これからの日本機械学会の役割は？

井上 卓見
Takumi INOUE

(正員, 九州大学助教授 大学院工学研究院 知能機械システム部門)

本欄に投稿するにあたり、日本機械学会のホームページを閲覧していたところ、会員数を示すグラフ(図1参照)が掲載されていた。会員数は、終戦を一つのピークとして戦前に大きく増加、さらに、高度成長期を通じて再び大幅な増加を示した後、オイルショックでピークに達し、バブル期に持ち直したものの再び減少傾向を示している。このことは、我が国の成長度を極めて明確に反映しており、機械工学に関わる技術や学問が、近代日本の発展の根幹をなして大きく貢献してきたことがわかる。しかしながら、近年の日本経済の低迷により、企業活動、延いては学会の活動も大きな曲がり角にきていることは、多くの人が感じているところであろう。学会員数の頭打ちが、このことを象徴的に示しているようである。

このような時期に学会に期待されることは何であろうか。このような時期であればこそ、原点に立ち返ることが肝要であろう。学会のホームページには、日本機械学会の役割として、「会員相互の学術の向上と社会への技術成果の還元」と謳われている。「学術の向上」については、論文集、講演会、出版物などを通じ、その活動が実感できるが、「社会への技術成果の還元」はどうだろうか。企業活動に注目すれ

ば、機械工学に関連する企業は大小あわせて数多く存在する。しかしながら、いくつかの企業は学会と緊密に関連しているものの、大部分、とくに中小の企業は機械学会と無縁であろう。多くの企業では、問題が生じると、専門の大学の先生を探す方向には行くものの、専門の学会にコンタクトすることはあまりないように思われる。企業が各自の要求にベストマッチする大学の研究者を探すことはそう容易ではない。このあたりに学会として何らかの可能性を考えることができないだろうか。

もう一つの重要な事項として教育、とくに、大学等を卒業した後の技術者教育が挙げられる。以前は、多くの企業で十分な社内教育が行われていたが、現在ではその余裕も徐々に失われてきたようである。このような時期にこそ、大学、さらには学会の存在が重視されるべきであろう。これまでに行われてきた講習会だけでなく、さらに大きな役割を担ってほしい。他人任せでなく、個人のスキルは個人でアップする時代が到来している。このニーズにこたえる方策はないであろうか。とくに昨今は、技術レベルの向上とともにマネジメント能力の向上も求められている。そのために、学会を中心として、内容をとくに技術者向けに

編成したビジネススクールのような制度を創設することは不可能であろうか。なお、意味合いは異なるが、近年開始されたJABEEにおいて、機械学会が中心的役割を果たされることを期待している。

以上、個人的に思うところを簡単に記述してきたが、すでに多くのことが実行され、私の意見が単なる杞憂ならば幸いである。機械工学がこれからも産業の根幹を支える技術・学問であることは疑いがなく、すでに100年以上の歴史を持つ日本機械学会が、その中心を担い続けることを期待したい。

(原稿受付 2003年5月22日)

図1 日本機械学会創設以来の会員総数の変遷 (日本機械学会ホームページから)